

稲わら活用推進のため飼料用かぶの周年栽培

三浦 梧 楼

難利用（未利用）の飼料資源として稲わらの積極的活用については国の畜産政策の中でも「稲わら利用促進簡易基盤整備事業」のメニューで実施されようとしておりますが、昨今の配合飼料高騰と膨大な国内産の「良質セルローズ源」である稲わらの存在をみるとときにはなせもっと早くにの感を禁じ得ません。勿論過去に於ても稲わらの飼料利用は行われておりましたがそれ以上に焼却廃棄が行われています。この飼料不足の時期になんとモツタイないことです。

稲わらの利用現況（昭和48全国）単位：千ト

区 分	飼料用	敷料用	加工用	堆肥用	焼 却	計
数 量	1,967	1,165	1,347	4,335	3,174	12,000
割 合%	16.4	9.7	11.2	36.2	26.5	

1) 稲わらの飼料特性（良質で豊富なセルローズ源）

飼料としての稲わらは牧草、飼料作物のように粗蛋白質、粗脂肪、炭水化物等の有機物と無機物（灰分やミネラル）、ビタミンの総てを期待することはできませんが、家畜に満腹感を与え、消化に重要な役割を果し、ある細菌に分解、消化される良質セルローズ（粗セン維）源として貴重な飼料です。問題はこれの単用、偏用では飼料成分的に不足なものができますからこれを補完するための併給飼料への配慮が必要となってきます。

2) 飼料用かぶは稲わら活用の推進役

乳牛用流通飼料で広く普及利用され、価値を高く認められているものにビートパルプがあります。

然しこのビートパルプも最近の高騰では価格面からも粗飼料的利用は容易ではありません。

そこで豊富な稲わら（低蛋白、多センイ）を主体として栄養成分的補完をしてビートパルプの代替的存在たらしめる推進役を選定してみますと、それはズバリ各地で栽培の容易な飼料用かぶです。

右表の示すとおり乾燥パルプ1kgに相当する栄養補給は乾燥稲わら0.5kgと飼料かぶ（茎葉つき）

飼料	成分	粗蛋白	粗脂肪	粗センイ	粗灰分	可溶性無窒素物	備 考
ビートパルプ(乾)	1kg中	82	8	172	36	570	
A) 稲わら(乾)	0.5kg中	21	8.5	143	77	190	
かぶ根部(生)	1.0kg中	15.6	1.4	13.8	10.3	77	} 根部、茎葉各50%とみて
々茎葉部(生)	1.0kg中	38.6	3.0	14.4	17.7	60	
B) かぶ合計	2.0kg中	54.6	4.4	28.2	28.0	137	
A)+B)		75.2	12.9	171.2	105.0	327	

2kgで期待できます。kg 50円前後のビートパルプが容易に入手できる稲わらとがどこでも容易に栽培できる飼料かぶの併給かの択一ということになります。

3) 飼料用かぶの周年栽培

稲わら活用推進の担い手を飼料用かぶにもとめようと思えば、周年利用する稲わらであるだけに飼料用かぶの周年栽培が必要となってきます。

飼料用かぶの周年栽培での注意事項は品種の使い方です。

○改良紫丸かぶ……早生で完熟までの生育日数90日、早春の低温時播種でも殆んど抽苔しない（周年栽培可能）

○小岩井かぶ……中生で完熟迄の生育日数100日前後、早春播種は抽苔しやすいので、夏、秋まき用

○下総かぶ……晩生で完熟迄の生育日数120日前後、早春播種は抽苔しやすく小岩井かぶ同様夏、秋まき用

4) 飼料用かぶは省力バラまき栽培で

間引き、除草の手間のいらぬ省力的なバラまき栽培の概要は

○施肥量（10a当kg）完熟堆肥は2~4t、硫酸40、過石40、硫加10（炭カル100~200）

○除草剤トレファノサイド2.5%粒剤4.0kg（10a当）又はトレファノ乳剤400g（10a当）

○かぶ種子70g（播種向攪土する場合）攪土のできない時は30gでよい

○播種は碎土、整地が終れば基肥（化学肥料）+除草剤（粒剤の場合）+種子をよく混ぜて圃場全面にムラなく散布

○攪土、鎮圧、散播后ロータリーで浅く（3~5cm）攪土し、除草剤、肥料を土壤に混和せしめて、鎮圧します。攪土のできないときは鎮圧のみ。

○除草剤にトレファノサイド乳剤（価格的に安い）を用いるときは播種、攪土、鎮圧直後に散布。

○害虫防除、発芽期のゾノミ、生育全期の青虫、夜盗虫の発生をみたら早期に殺虫剤ダイプレックス粉剤を散布（10a当3kg）

○収量10a当約20,000個体立毛し慣行栽培より30~50%増収